

横浜市小学校社会科研究会

5 学年部会

研修会記録

第 5 号

令和3年 12月 1日

横浜市小学校教育研究会

会長 後藤 俊哉

横浜市小学校社会科研究会

会長 梅田 比奈子

同 学年部長 田村 拓之

【授業日時】

12月 1日 (水)

授業者 比嘉 将来 先生 (西富岡小)

【会 場】

横浜市立西富岡小学校

司会 加藤 拓 先生 (蒔田小)

記録 結城 巳貴 先生 (浦島小)

1 提案内容 単元名

単元名「自然災害とともに生きる～地域ごとに見える日本の減災～」

2 提案者より

子どもがよく頑張っていて、学習に対する熱量があった。5年生の単元として自然災害に対する備えを全国的に学ぶ必要性があると感じ、今回は2つの地域（岩手県陸前高田市、和歌山県串本町）を比較して日本の防災・減災対策について考えられるようにした。授業としては防潮堤を作らないことに対して「納得」、「納得できない」の二項対立のようになってしまい、本時で考えさせたいところまでいくことはできなかった。

教師が提示した資料（串本町漁業組合の方の話）に対しての問題点についても考えることができる姿から、社会科の力が育っていると感じた。

視点①

○学習計画づくり

全国の俯瞰⇒事例①（陸前高田市）⇒ふり返り⇒事例②（串本町）⇒全国
まず、全体を俯瞰して、その後事例を見ていった。陸前高田市の対策と串本町の対策を見ることで自然と子どもから「なぜ、串本町では巨大防潮堤を作らないのか」という疑問が生まれていく流れとなった。

視点② 本気の学習問題について

「2分で津波が来るのに、なぜ、串本町は防潮堤をつくらないのだろう」

南海トラフ巨大地震が発生すると2分で津波が到達されるという予測がされている串本町が巨大防潮堤をつくらないという選択をした理由について考えることを通して我が国の防災や減災に向けた対策や事業の役割について考える本時を目指した。

授業内での子どもの発言

C：私はこれまで、やっぱり防潮堤が津波に対しては一番効果が高い対策なのかなと思っていただけ、やっぱり、あの、対策もまちの特徴に合わせていかないとうまくいかないんだなと（思いました）

2 協議会

全国の防災対策（過去）を見つつ串本町（未来）に入っていく単元計画は良い。

既習事項を生かした発言が授業内で見られた。

子どもたちから自然とズレが生まれていく単元計画となっていた。

熱量を持って学んでいたからこそ、児童が自分の言葉で語っていた。

社会科の授業に向かう熱量がすごい。昨年度からも更に成長している。

「漁業組合の二人の意見だけでは分からないよ。」といった発言から、子どもたちの考える力が素晴らしいと感じた。

自分の考えの時点で話し合いの立場に違いを感じた。

⇒「納得できるか、できないか」を考えている児童と、「なぜ防潮堤を作らないのか」を考えている児童がいた。

児童が自由に発表した後、教師が授業をリードしていくことで予定内容を全てできたかもしれない。

資料をじっくりと考えるのもいいのではないか。

納得できる、できないで焦点化する時間があっても良かったのかもしれない。

<講師の先生より> 鎌倉女子大学 准教授 大塚 俊明 先生

子どもがよく育っていて自分の思いを自由に語っている。教師が子どもの発言をひろいながら授業をしている。それ故に、より本時やることをはっきりとさせることが大切である。019「お金で命は買えますか お金で命を守れるのは確かだ」に対してみんなはどう考えるか問い返して、お金で命を守るというハードパワーだけでなく、ソフトパワーに目を向けさせ多重防御に気付かせていくことが大切だったのではないか。発言をひろって全体に広げていくということが大切である。

<講師の先生より> 早稲田大学 教授 藤井 千春 先生

子どもたちが真剣に考えていた。2つの地域（実際に災害があった地域とまた起こっていない地域）の2つをどのように繋げていくのかが大切である。

公共とは、いろんな立場の人がいる中で利害を考えていく。5年生は大きな視点でそれぞれの立場や利害、そして行政と自分たちという風に考えていくことが必要になってくる。

文責 比嘉 将来（西富岡小学校）